

第1回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「水音の虹」

豊島岡女子学園高等学校一年 山崎美穂



賢治のまちから
高校生★童話大賞

『水音の虹』

豊島岡女子学園高等学校 一年 山崎 美穂

緑の森がみえてきて、川の音も聞こえてきて、「おばあちゃんち」の風景が広がります。美花はもう、走り出したいくらい…。

美花は七歳。今年小学校に入学したお祝いに、夏休みは一人でおばあちゃんの家まで行かせてもらえることになったのです。

美花はおばあちゃんの家が大好き！同じ年の三人のいとこもりで、大きくて、アニメに出てきたトトロが出て来そうな森もあるし、魚のいる川もあるから！お兄ちゃんが、

「虫ばっかいる田舎なんて、行きたくねー。」

と言っているが、美花にはどうにもこうにも、よくわからないのでした。

「おばあちゃん！」

おばあちゃんの姿が見えると、美花はダッと走り出しました。おばあちゃんの家からは、二人の男の子と一人の女の子が出て来ます。美花が来るのを

今か今かと待っていた、三人のいとこたちでした。





賢治のまちから 高校生★童話大賞

一時間後、美花といとこたちは、おばあちゃんの切ってくれた山盛りのスイカと一緒におばあちゃんの畑の端っこにすわっていました。すぐ後ろは大きな森。

「美花はさ、いつつも来るのがおそいよ。」

そう言つたのは健。いつもは隣の隣の町に住んでいます。眼鏡をかけていて、難しい言葉を時々使つて、テレビの『けんきゅうじょ』の『はかせ』そつくり。だからあだなはハカセ。

「美花ちゃんはあんたと違つてお家が遠いんだからしようがないでしょっ！」これは綾。おばあちゃんの家の近くにお家があります。しっかり者で、あだなはアネゴ。これは美花のお兄ちゃんが名づけ親。美花たちは、よく意味がわからないけど、なんだか面白くつて、こう呼んでいます。

「アネゴもハカセもやめて。」

につこりおつとり言つたのは勇。綾と同じで近くに住んでいます。優しくて、のんびりに見えるから、のんつて呼ばれています。『のんびり』ののなんんです。

「みんな仲良く、でしょっ。」

美花が言います。美花はなんて呼ばれてるかというと：美花は美花なんです。前に、

「美花っていうのは、可愛いお花つてことなのよ。」

つて美花のお母さんが言つたので、そのままなんです。だつて美花はいつもニコニコ。笑つた顔はお花みたいに可愛いから！



賢治のまちから 高校生★童話大賞

「ところで美花君。今日、君に話すのはだな。」

ハカセが偉そうに言いました。ハカセは偉そうに言うのが得意なんです。それからゴホンと咳払いをして、アネゴとのんにチラツと目配せをして、声を低くして、言いました。

「森に、おばけが、いるんだ。」

美花の手から、食べかけのスイカがポロッと落ちて行きました。
「…おばけって、白くフワアとしているやつ？」

ハカセは首を横にふり、話し始めます。アネゴも一緒に喋ります。
「違う。男の子。同じくらいの。」

「でも、私たちの知らない子なの。それに…」

アネゴが言いかけたところへ、美花が口を挟みます。

「どこからか来た子じや、ないのかなあ？」

美花が言ったところへ、のんがゆっくり、静かに話し始めました。

「その子はね、光つてた…虹みたく。」

沈黙してしまったみんなの調子を取り戻させたのは、ハカセでした。

「男の子をもう一度見ようではないか！早速作戦だ！」

誰も反対しません。怖いものみたさっていう気持ちと、『作戦』なんていう、カッコイイことにひかれたんです。

「作戦にはね、基地とか作って、名前をつけるのが、必要なのよう。」

しつかり者のアネゴが仕切り始めます。



賢治のまちから 高校生★童話大賞

しばらくして、作戦にはぴったりの名前がたくさんつきました。

畑の端っこ…きもち（基地）

森…とところのもり（トトロの森）

森の真ん中の沼…かいぶつぬま（怪物沼）

沼のとなりの小さな池…ふしぎいけ（不思議池）

沼と池の間の大木…ぬしぬき（主の木）

みんな、大満足。

ところで、ふしぎいけは、村のおばあちゃんたちの話をこつそり聞いたものを、名前にしたんです。こんな、話でした。

「今年も、森の池は、枯れてしまうのかしらねえ…。」

「毎年毎年、夏がおわると枯れてしまつて、次の年には元通り。

不思議、不思議。」

作戦をたて初めて三日。四人は早くもしほみ始めていました。今日もきちに集まつてはみたものの、みんな、黙りこくつています。聞こえるのはセミの声だけ。

「あああ、どうしよう！」

アネゴが大きなため息をついて言いました。

「今日はさ、別なこと、しようよ、きぶんてんかんも必要でしょ。」

ハカセが難しい言葉を使ってみせます。気分転換なんて、みんな始めてきく言葉。



賢治のまちから 高校生★童話大賞

「じゃあね、そのきぶんかんてんのために、隠れんぼうしたらどう？隠れると美花が提案します。

「かんてんじやなくててんかん。うん、しよう、しよう。」
ハカセもみんなものってきます。やることが見つかって、大喜びなんです。

「一、二、三…。」

早速始まります。すぐ始まるのが、四人のすごいところ。オニはのん。後出しを二回もしたから、怒ったハカセに、そうだ、とろのもり！美花って頭いい！）美花は自分の考えにご満悦。木のしげる森の中へ走っていきます。森は、ちょっと暗くて、夜だったら、絶対入りたくない所ナンバーワンになりそうな所。

美花は、ぬしのきのふすぎいけに近い方のうろの中に隠れることにしました。シンとした薄暗い森で、体育座りをしているのは、怖わいものです。

（ぬしのきに食べられちゃうかも…。）

美花の頭に、次から次へと怖い事が浮かんでは消えしていく、もう限界になつたその時、美花のいるうろの目をサツと光が通りすぎました。美花は慌てて目で追います。

「…虹色の…男の子…！」

美花はびっくりして、口をりんごが入りそくなくらいあけて、止まつてしまいました。

（あれがおばけなのかな…。でも…きれいで、あんまり怖くな



賢治のまちから

高校生★童話大賞

いなあ。)

びっくりがおさまつてくると、もともとはどつても元気な美花。男の子を追いかけたくなつてしましました。

「まつて！まつて！まつて！」

美花は全速力で走ります。鬼ごっここの得意な美花です。春の運動会でリレーの選手になつた美花です。

「つかまえた！」

大声で叫んだ男の子の肩に手をかけた美花は思わず、あつと叫んでしまいました、

手が光の中へ入つて行きます。キラキラと虹色に輝く、光の中に。

「ねえ、なんで逃げるの？おばけなの？」

その言葉に、光る男の子は止まりました。

「ち…違うよ…僕、おばけじや…ないもん…。」

振り返った男の子のオーロラのような瞳から、いろんな色の涙が転がり落ちます。赤、青、紫…。

「うめんね。美花が笑いの…？おばけって言つちやつたから…？もうあんなこと言わないから。ね？」

美花はぽろぽろ涙を流す男の子に大弱り。なんとかなだめて、さつきのうろにつれて行きました。

「ね、なんでここにいるの？お名前は？おばけじやなくつてなあに…？」男の子を座らせるが早いか、美花は男の子を質問責め。

男の子は答えます。」

「ぼ、僕は…水音。…おばけじゃなくって…何だらう?…」

そして、ポツリと言いました。

「僕、僕、食べられちやうかも…。」

美花は、木のうろの中で始めて水音を見たときと同じくらい、口を大きく開けて、水音をじっと見つめました。水音は続けます。水音の話は、こんなことでした。

昔々から、『ふしげいけ』はとてもきれいな池でした。木と木の間から時おりさす太陽や月の光で、池はキラキラ光りました。あんまりキラキラ光るので、その光から、一人の虹色に光る子供がうまれ、その子供は自分の住む池を守るようになつたのでした。池の隣には沼があります。美花たちの『かいぶつぬま』です。そこは池とは反対で、昔々からどんよりにごつていました。そしてそこにごりの中から、怪物がうまれたのです。名前をバックンベロンといいました。バックンベロンは夏以外は眠っています。光がいつもよりさす、夏だけ、起きてくるのです。

そして虹を三本食べないと死んでしまいます。バックンベロンは、光に憧れた生き物なのでした。

ひと夏で虹が三本出ることは、そうそうないことです。お腹のすいたバックンベロンはある日、『ぬしのき』の側を走り回る虹色の子供を見つけました。

すると不思議なことに、お腹がいっぱいになりました。虹色の



賢治のまちから 高校生★童話大賞



賢治のまちから 高校生★童話大賞

子供は、虹三本分以上に値したのです。そのことを知ったバツクンベロンは、虹が三本出ないと、虹色の子供を食べるようになりました。

ほとんど毎年、虹色の子供が食べられてしましました。虹色の子供は食べられても、食べられても、翌年にはまた、違う子がうまれきたのです。池は、子供がいない間、水が枯れるようになつていました。池にとつても、子供は大切なものになつていたのです。そして今年、水音という男の子が生まれてきたのでした。池が話した、水の音色という意味の名前を持つた、男の子が…。

水音が話しあわると、森の中はシンとしてしまいました。

「…水音君も、食べられちゃうの？」

話をきいて、悲しくなつた美花は、泣きそうになりながら、水音にききました。

美花の言葉をきいて、またホタホタと涙をこぼしながら、水音が言います。

「僕、うまれた時から、なぜかこのことを知つてた。それで、誰かに助けてもらおうと思つたんだ…。池は…ね、誰かに助けてもらおうなんて考えたの、僕だけだつて。でも、やつぱり怖かつた…！」

泣き出してしまつた水音を見て、美花は逆にやる気になりました
「美花にまかせて！美花のお友達はみんなやさしいんだから！き

つと、水音君、助かるんだから！」

ハカセとアネゴの口が、まるでまな板が入りそうなくらい大きくなつて止まっています。のんはいつものようににつこり笑っています。ここはきちから少し来た、とどろのもりの入り口。

「そつそんnaつ。本当にいるなんて…。し…しんぴだつ！」

ハカセが難しい言葉で叫びました。

「おばけじやなかつた…？」

アネゴもつぶやきます。

美花は水音を励まして、みんなのところへつれて行つたのです。そしてみんなが何か叫び出す前に、美花のきいた話を、みんなに話したのでした。

「と、とにかく、水音を助けなきや。」

ハカセが調子を取り戻し始めました。

「バツクンベロンを倒しちゃえばいいのよ。」

アネゴが言います。

「そうだな。まだ夏に入つて一つ虹を見てないし…。悪いやつを倒そう！」

ハカセとアネゴはもうすっかりヒーローになつた気分で大はしゃぎ。

「待つて。」

のんが句碑を挟みました。みんなは急にシンとなります。



賢治のまちから 高校生★童話大賞



賢治のまちから 高校生★童話大賞

「あのね。バツクンベロンはさ、お腹がすいて死んじやいそそうだつたから、光る子を食べちゃったんだよね…? だったら、バツクンベロンは、とつても悪い人、なのかなあ…?」

そして一息ついて続けました。

「僕、思うんだ。バツクンベロンが水音君を食べちゃうのは絶対ヤダ。でも、バツクンベロンがお腹すいて死んじやうのも、かわいそうで…。」

のんがそこまで言うと、ハカセが手をポンッと打ちました。ハカセのひらめき印です。

「そつか…。のん、わかつた! バツクンベロンがさ、水音を食べないでも、お腹いっぱいにさ、なればいいんだ。」

のんは嬉しそうにニコニコ。アネゴと美花はハテナマーク。ハカセは咳払いをしました。

「虹を、作れば、いいのさ!」

のんはやっぱりニコニコ。アネゴと美花はびっくり。

「どうやつてそんなことができるのよ?」

アネゴが不思議そうにききました。

「まだわからない…。けれどこのハカセにまかせてくれたまえ。きつと作つてみせるから!」

「みんなで考えれば、きっとできるわよね。」

アネゴも言いました。アネゴもハカセも、頭の切りかえが、とつても速いんです。



賢治のまちから

高校生★童話大賞

そこへのんがまたまた口を挟みました。

「水音君。水音君には、ちょっとここ、暑いでしょ？ふしぎいけでゆつくりしていく。」

みんな、水音のことは、すっかり忘れていたのでした。

「うん…。」

水音は言つて、ふしぎいけに帰つて行きました。水音はこわい顔でした。つかれているだけでは、ないようでした…。

その後、四人は二つに分かれて、どうすればいいか探すことになりました。くびきで、美花とのん、ハカセとアネゴに分かれました。ハカセたちは、もう走り出しています。

美花とのんだけになると、なんとのんは、とどろのもりにもう少し入った所で、座りこんでしまつたのです！

「のん、どうしたの？」

美花は驚いてのんに話しかけました。美花の顔を、じいつと見つめるのんの顔は、いつものように、につこり笑つたのんでは、ありませんでした。

「美花ちゃん、僕、ダメだつた。」

のんの声は、とても沈んでいました。

「あのね、僕、バツクンベロンは悪くないかもつて言つちやつたでしょ？だけど、僕はきっと、水音君の前で、あんな風に言つたらね、いけなかつたんだ！水音君は、自分とおんなど風にうまれ



賢治のまちから 高校生★童話大賞

てきた子、みんな食べられちゃつたんだ！美花ちゃん…。もし、バツクンベロンにお兄ちゃん食べられちゃつたら、どう…？」美花はとてもとても考えました。とてもとても、難しいことだつたから。

「美花ね、考えたんだけど…。」

美花はやつと口を開きました。

「お兄ちゃんを食べられちゃつたら、きっとバツクンベロンのこと、すんごく悪いって思うと思うの。だけど、バツクンベロンをやつつけても、お兄ちゃん、戻つてこないでしょ？」

美花はこう言いながらも、きっと、バツクンベロンを倒したら、すつきりするな、と思つていました。でも、言いました。

「美花ね、ただ、代わりに虹をあげるんじやなくつて、どんなに悲しかつたか、どんなに怖かつたか、教えればいいって思う。そうすれば…その悲しいの我慢すれば、きっと

強くなれるし、バツクンベロンにもわかつてもらえるつて思うの…。本当にするのは難しいかもしないけど、ええと…ハカセの言う難しい言葉で言うと…きぼうなの…。」

のんはじつと美花の言つていることをきていました。そしてもう一人、木の影から話をきていた人がいました。…水音でした。（のんのバカ！やつぱり僕のことなんて、ちつともわかつてない…。）

と思つていた、水音でした。



賢治のまちから 高校生★童話大賞

一週間以上たつたある日のことでした。先にきちについた美花とのんが座つていると、ハカセとアネゴがものすごい熱いで走つて来ました。砂ぼこりがたつています。

「のん！ 美花！ 虹を作る方法、見つかつたか！」

ハカセが言い、のんと美花が首を横にふりかけた途端、アネゴが言いました。

「わかつたの！ おばあちゃんがね、庭にホースでサーッて水をまいたら、虹ができたの！ だけど、曇りの昨日はダメで、ピカピカお天気の今日は、よかつたの！」

のんと美花は目を輝かせました。そこへハカセが口をつつこみます。

「だけど、森にはホースを入れる蛇口がないだろ‥。きちは畠だから、あるけどさ‥。だから‥。」

ちよつと止まってハカセは言いました。

「水音におとりになつて、ここまでつれて来てもらおう！」

のんと美花は氷みたいに固まつてしましました。なぜつて‥なぜつて‥この前、あんなことを考えたばっかりだから。水音の気持ちを考えたばっかりだから。

「美花は‥やつぱり‥い、」

いや、と言おうとした時、森からサッと光が走り出てきました。水音でした。



賢治のまちから 高校生★童話大賞

「僕、やるよ。」

水音の言葉に、なんのためらいもありませんでした。水音は、いっぱいいっぱい考えました。そして、水音は、バツクンベロンを助けることにしたのです。たくさんある答えを取ることにしたのです。『許す』という答えを…。

さあ、ハカセたちの作戦、『水音をおっかけてやつて来たバツクンベロンに虹を食べさせよう大作戦』は成功したでしょうか？私は成功したって思うんですよ。なぜって、ぬしのきのうるの中に、誰が置いたのかわかりませんが、こんなことを書いた石がゴロンところがつっていたからです。

水音の虹を知ってるかい？

たくさん答えがあつたけど
選んだ答えはこの答え

自分で選んだものだから
後悔なんてしないんだ

水音を助けた四人の仲間

二人は心優しくて

二人はとつても行動派



賢治のまちから 高校生★童話大賞

どちらかだけじやダメなんだ
どちらもなくちやダメなんだ

五人の答えと行動は

大成功 大成功

これからずっと続くだろう
池と沼をつなぐだろう

水音の虹は教えてる

いっぱいいっぱい悩むこと
自分で道を選ぶこと
出来ればきっと大きくなれる

水音の虹を心にね